

# 最終電車

鈴子

## 最終電車

---

夏の最終電車は150%の乗車率で地獄と化する。そう覚悟して乗ったのだが、クーラーが効いているのか意外に涼しかった。だが、身がよじれないほど混雑している。俺は土産が潰れないよう、網棚へと避難させた。妻の好みがレアチーズケーキだったことを、俺は結婚7年を経てようやく覚えた。

涼しいせいかわ仕事の疲れか、一杯ひっかけたせいかわ。まぶたが重くなるのを感じながら、俺は立ったまま寝ちゃえる人間の凄さに感嘆しつつ首を揺らす。

だが眠ることはなかった。いや、ちょっと寝ていたのかも知れない。突然すぐ耳元で、妻が「あなた！」と怒鳴ったのだ。

恐ろしい声に叩き起こされて窓を見やると、よく知っている遮断機を通りすぎたところで、駅が見えていた。こりゃ大変だ。降りそびれたら、最終電車じゃ戻れない。

「降ります、通して、通して下さい」

人を縫って、大慌てで出口へと、にじり寄る。俺は何か、ぺっと吐き出されるようにして、ホームへ転がり出た。俺の他には、誰も降りなかった。振り向くとドアは既に閉まり、ホームから滑り出していた。中が見えにくい、奇妙な人混みを詰め込んで。俺は冷や汗をびっしょり掻いていた。

顔を拭い、手を見て、ケーキを網棚に忘れてきたことに気付いた。……だが多分……いや、きっと。妻の手に渡ることだろう。

妻が踏み切り事故で亡くなって48日目の、暑い夜のことだった。